

なった。インタビューをするためには、適切な質問ができなければならない。そこでまずは、インタビュー以外で利用可能な情報をすべて頭に入れるべく、軍政当時の新聞・雑誌をあたることから始めた。

しかしこれがなかなか順調には進まない。新聞のコレクションがあるのは国会図書館だけだったが、当時は職員集会のためと称して時々前触れなしに閉館した。ひどいときは、夏季一カ月間休館のはずが、ずるずると半年も閉まったままであった。一部の雑誌は大学の資料センターにもあったが、一人しかいない担当者が時々遅刻する。あるときは朝から昼近くまで待たされた。担当者が現れたときに聞いてみると、午前中欠勤の許可を取ったということであった。貼り紙くらい出してくればよいのにと恨めしく思ったことは言うまでもない。

結局、新聞・雑誌やその他の資料にひととおり目を通したときには、すでに一年半が経過していた。そこで、当初の予定二年間のところ、自費で一年間滞在を延長し、後半の一年半でインタビュー調査を行うことにした。

### 👑インタビューに明け暮れた日々

軍事政権の関係者には、ペルーのマスク

ミで自分のことが騒がれるのを嫌う者が多い。弾圧や汚職の責任が疑われている者もいる。見ず知らずの者が軍内のことを根掘り葉掘り聞いても警戒して答えてくれないだろうと思った私は、インタビュー申し込みに必ず紹介を通すことにした。そのため、それまでに名前を把握していたインタビュー候補を優先順位に従って分類し、優先順位が最も高い数十人のリストを作成した。最初のインタビューは留学先大学の先生など、つてのあった人から紹介してもらったが、その後はインタビューの最後に、「このリストの中から紹介していただける人はいませんか」と尋ねて紹介をお願いした。

この辛づる方式で、最終的には一二人（うち軍人が六六人）にインタビューを行うことができた。このうち三九人は一九六八〜七六年に閣僚を務めたが、これは全閣僚の半数以上にあたる。最短のインタビューは一〇分で終わったが、ほとんどのインタビューは一回に数時間、長いときには六時間ぶつ通しであった。一回で終わらなければ何回もインタビューをお願いし、最多で一〇回も煩わせたインタビューもあった。退役軍人など比較的時間に余裕のある人が多かったとはいえ、日本からの一学生に快

く時間を割いてくれた方々には今でも深く感謝している。

紹介を通すようにしたことは正解だったと思っている。ある機会に日本大使館の方が教えてくれたのだが、必ず紹介を通していたにもかかわらず、大使館のほうには「大串というのは何者か」という問い合わせがいくつもあったという。幸い、大使館の方には懇意にしていたので、「その人はちゃんと学術的な研究をしている方です」と答えて下さっていたそうである。

帰国してからは無事に東京大学に博士論文を提出した。それをもとにして後に出版した本が大平正芳記念賞を受賞したときには、留学中の苦労が報いられた気がした。その後、ペルーを中心にラテンアメリカの社会運動、左翼思想、人権侵害とその後始末をめぐる政治などを研究してきたが、最近また、ペルーの軍事政権に関する新たな資料を調べている。かつての研究に新たな調査の成果を取り込んでペルーで出版したいというのが私の目下の計画である。

最後に、私が国際文化交流財団から得た貴重な支援に改めて感謝するとともに、財団の支援が今後も若い研究者の卵に与えられることを願ってやまない。

# ペルー留学の日々

東京大学法学部教授

大串和雄

おおぐし かずお



国際文化教育交流財団一九八三年度奨学生。一九八三〜八六年、ペルーの首都リマのカトリック大学に留学。一九九〇年東京大学大学院法学政治学研究科修士(法学博士)。山形大学人文学部助教授、国際基督教大学教授等を経て、一九九九年から現職。専門はラテンアメリカ現代政治、比較政治。

## 留学は死活問題

一九八二年に博士後期課程に進学してまもなく、私は留学の準備を始めた。私の専門はラテンアメリカ政治であり、研究のための資料が日本にはないので、現地に行かなければ研究のしようがない。他の地域でもそうだが、それでも先進国や一部のアジア諸国の政治なら、日本に多少の資料はある。しかし私が研究しようとしていたペルー政治の場合には、まったくと言ってよいほど日本に資料がない。一部の専門分野であれば、「留学したほうがよい」という言い方が成り立つかもしれないが、私の場合は、「留学しなければ研究のしようがない」のだ。それでも修士論文は何とか日本で入

手できる資料で間に合わせたが、現地に行かなければその先に進めないことは明らかであった。

当時、先進国やアジア諸国に行くための奨学金は複数あったが、ラテンアメリカに行ける奨学金は、留学先がメキシコに限定されているものを除いては、国際文化教育交流財団しか存在しなかった。メキシコ留学では研究の目的が果たせない私にとって、当財団の奨学金を得ることは死活問題であった。財団のスペイン語による面接試験で動詞 *leer* (読む) の活用を何度も間違えたことを思い出すと、今でも冷や汗が出る思いがする。それでも何とか合格でき、それまで飛行機にも乗ったことがなかった私は、初飛行で地球のほとんど反対側まで行

●国際文化教育交流財団は、経団連第二代会長故石坂泰三氏の遺徳を記念し、一九七六年に設立された。これまでに、世界三一カ国の大学・大学院へ一七九名の日本人留学生を派遣するとともに、世界三七カ国五一六名の外国人留学生への奨学金の供与や講演会等を実施してきている。

くことになった。今日私が研究生生活を送っているのは、まさにこの奨学金のおかげである。

## 図書館での苦闘

私の博士論文の研究対象は、一九六八〜八〇年のペルーの軍事政権であった。この軍事政権は、農地改革、広範な企業の国有化、労働者自主管理セクターの創設などを実施し、ラテンアメリカには珍しい「左翼的」軍事政権として、一時は世界の注目を集めた。しかし改革を率いたベラスコ大統領は一九七五年に軍内クーデターで失脚し、一九七六年までには急進的将官が軍内から一掃される。この軍内政治の動態の解明が研究の主たる狙いであった。

しかしペルーに着いても、政府内文書など非公刊の一次資料はほとんど利用できなかった。したがって、公刊されているメモワール類を除けば、軍政当時の新聞・雑誌と当事者とのインタビューが情報源の柱と